

FLOWER KNIGHT GIRL ~  
花言葉と共に~

彩夏&島風

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品はDMM・comにて配信されている『FLOWER KNIGHT GIRL』の二次小説になります。

1話ごとにメインのなる花騎士を決め、その子を中心として進めて行きます。

サブタイトルはその話のメインとなる花騎士の花言葉になっています。

※作者の持っていない花騎士は出てきません。ごめんなさい！

# 目次

『大切な思い出』

1



## 『大切な思い出』

「絶剣・紅炎爆葉刃!!」

古代害虫から放たれたハ工型害虫3匹を、少女が大剣でまとめて切り裂き消滅させる。

それをやったのは『大切な思い出』の花言葉を持つ花騎士、モミジであった。

「ありがとうモミジ。助かった」

「いえ、これが私達の仕事です」

そんなモミジに声をかけた青年。

彼は花騎士<sup>フラワーナイト</sup>たちを束ね、指揮をする『団長』その人だった。

普段は五人一部隊を四部隊、友軍を合わせ最大五部隊を指揮している団長は、現在巨大な害虫、古代害虫を討伐するためにクジラ艇と呼ばれる艇に乗っている。

そして古代害虫討伐時には八部隊、四十人も花騎士たちを連れてゆく。

「それに、私一人ではここまでできませんでした」

そう言うともミジは後ろへと振り返る。

そこにはモミジと同じ第一部隊に所属する花騎士たちがモミジの言葉に照れくさそ

うに、ある者は胸を張るようにしてこちらを見ていた。

「団長さまっ!」

栗色を髪をした少女、ナズナ。青年が団長に就任した時から補佐官として団長、花騎士たちを支えてきた彼女は、大きな声で団長を呼ぶ。

「逃げていた古代害虫が移動を止めました! 仕留めるのなら今です!」

「そうか。ナズナ、シャインクリスタルは?」

「既に限界まで溜まっていきます!」

「よし。クジラ艇、全速前進! ハエ型古代害虫が射程圏内に入り次第、あれを使う!」  
シャインクリスタル。害虫を倒すと手に入るその粒子は、溜めて放つことで害虫にダメージを与える必殺技を放つことができる。

「この距離なら……。ナズナ!」

「はい! ホエイルカノン、撃て!」

ナズナの声と共に、クジラ艇の口が開く。

六つのクリスタルが口の中を回りながら、光を溜め、そのまま六色の光線がそれぞれのクリスタルから放たれた。

「ビギイイイイッ!!」

ハエ型古代害虫はそんな甲高い悲鳴を上げながら撃墜され、地面に落下する前に煙と

なつて消滅した。

「クジラ艇の被害は？」

「最初に受けたひつかき攻撃のみで大きいものではありません。直ぐに修復も可能です」

「そうか。近くに害虫も見当たらない。任務終了だ。帰投する」

「了解ですつ！」

クジラ艇を拠点である城へ転進する。

団長はクジラ艇の自分の席である『箱』の中へと腰を下ろした。

「あの、やはり団長がそのような場所にいるのは……」

そんなモミジの言葉を受け、団長は補佐官へと半目を向けた。

「それはこの箱を用意したナズナに言ってくれ。俺だつて好きでここに収まっているわけじゃない」

「戦うための機能の調整や被害の修復で手いっぱい、団長さまのスペースを整える時間になかつたんです……。団長さま、すみません！」

「まあ、クジラ艇で任務に当たるのはまだ2回目だしな。古代害虫の復活も予想外のものだったし仕方ない。だがなるべく早く頼む。足がしびれてしょうがない」

「は、はい次回までには必ず」

そんな箱に入った団長は、他の花騎士たちにもからかわれながら、彼女たちのこんな

顔を見れるならまあいいか、とそんなことを考えた。



クジラ艇での古代害虫討伐の翌日。

特に任務のないこの日、団長はなんとなく訓練場へと足を運んだ。

花騎士同士で試合をしているもの、立てられた案山子を相手に技を放つもの。

それぞれが己を高めるために努力している。

その中で一人、一際激しく案山子に対して攻撃を行っている少女が目にとまった。モミジだ。

ふと、昔のことを思い出した。

モミジは一番というものに執着していた。

今でも一番を目指していることに変わりはないが、昔はそれしか見ていない、見えていないというほどに焦り、一番に執着し、目指し続けた。

足が震え、青白い顔で、完全なオーバーワークなそんな状態でも訓練を続けようとしていた。

もう肩を並べるのでできない姉の背中を追って。姉との約束を果たすために、ただ



ひたすらに。

だがそれも、団長が見つけた大討伐作戦の資料の中に、モミジの姉が同僚に向けた『妹の面倒を見て欲しい』というメッセージを見て、もう焦つたりしないと、たしかにそう言った。

もうあんな無茶な訓練はしないだろうが、昔ああいうことがあつた以上どうしても心配してしまう。

「モミジ」

「あ、団長？ 何かご用ですか？」

「いや、大分激しく訓練していたみたいだからな。その……」

「ああ、クスツ、大丈夫です。もうあのような無茶はしません。でもそうですね。折角心配してくれたようですし、少し休憩にしましょう。団長も少しお話ししませんか？」

団長は、珍しいなと思いつつ構わない、と返事をして、2人で近くのベンチへと腰を下ろした。

「団長は、誰かの一番になりたいと思つたことはありませんか？」

「どうした、いきなりに？」

「いえ、私の話はした事ありませんけど、団長自身の話はあまり聞いたことがないと思つて」

そうだったか？　と言う団長に、はい、とモミジは答える。

ふむ、と団長は顎に手をあて、しばらく考えたと口を開いた。

「あまり考えたことが無いな。周りにいた人が固定される事が少なかったからかもしれないが。今でも交流があるのは海軍で提督になったアイツくらいか」

団長は言いながら、もう長いこと連絡をとっていなかったなど、唯一の友人とも言える青年を思った。

「深海棲艦と戦う艦娘を指揮する人でしたね。私は艦娘さんには会ったことありませんが」

「まあ、普通は関わることがかなり少ないからな。……モミジは誰かの一番になりたいのか？」

団長が話を戻すと、モミジは顔を伏せ、声を絞り出す。

「私は……」

ガバツと顔を上げ、今度は団長の目を見据え、ハッキリした声で、顔を紅葉こうようした紅葉もみじのように紅くして、言った。

「私は団長の一番になりたいです。団長と一緒にこの世界を守って、歩んでいきたいです」

「っ！　そ、そうか」

「はいー」

団長はモミジからつい、顔をそらす。

恥ずかしくてモミジの顔を見ていられなかった。

それでも、チラッと横目でモミジを見た。

その顔は、まだ微かに紅く染まっついて……。

とても、綺麗で……。

「団長、ずっと一緒です」

団長は再び紅くなり、顔を背けた。